

座談会

「日中」の魅力を語ろう

＝ その歴史、人、これから ＝

日 時：2016年12月26日（月） 株式会社 電研社

日中経済交流研究会の幹事が集まった座談会。その誕生のいきさつ、集う人々の魅力、そして今後のあり方を語り合いました。

〔出席者〕 赤木真也（赤木法律事務所）、大塚教進（K総合会計）、大山武久（大山印刷）、落合良寛（三恵ハイブリジョン）、川西正哲（アンティ）、合田耕作（ギャラリー・クルー）、坂元正三（坂元鋼材）、田中隆昭（未来財務）、野村明宏（電研社）、樋爪伸二（タカラ産業）、福地守（福地金属）、藤田眞弘（日本度器）、二木崇（五光）、松岡雄祐（オーパーツ）、和気金昭（金剛運輸）、近藤淳（アジアプランニング：オブザーバー）

■始まりは訪中団

樋爪 1980年代、円高や人件費の高騰で「日本では生産がアカン、海外に持っていこう」という動きが出てきた。当時、副代表理事だった細川さんが蘇州の副市長とパイプがあった。細川さんに同行して中国に行くと、我々は10人にも満たないのに交通をストップしてパトカーが先導してくれた。昔の市長や副市長は力を持っていた。「もしだます人がいたら言ってくれ。江蘇省から追放してやる」と。その蘇州から熱烈なラブコール。それで工場を作った。その後、大阪同友会で正式に訪中団を組織して毎年行った。京都や兵庫の同友会メンバーも加わって10年くらい続いた。支部例会と違い、ざっくばらんで腹を割った裸の付き合い。開放的で一人一人の内面もわかる。プライベートや会社のことなど、何でも話せた。



昔は外貨兌換券の時代で金が掛かった。夜7時になったら暗かった。女性が化粧していなかったし、飲み屋もなかった。タクシーもなかった。日本と50年差があると言われていた。何があるかわからない魅力があった。

訪中団だけでなく体験談、苦労話などを伝えようとして組織したのが当研究会。中辻さん（大喜金属製作所）が初代会長。そのころには人脈・ノウハウがたまり、すでに進出しやすいレールができていた。中辻さんも蘇州に工場を出し、その体験談を話した。大学の先生

とも親しくなった。彼らも蘇州についてきて、見たことをしゃべっていた。それが例会の始まり。やがて定期的にやるようになった。

■活性化している、していない？

大山（司会） 大阪同友会の「同好会」という位置づけでありながら、いまや会員数60名以上で、うち約30名が幹事。毎月の幹事会には半数以上が出席。この活性化の秘密は何でしょうか。

福地 昔は遊びや悪いことをして覚えたことが多かった。会社でナンボー生懸命やっても出会えへんことが、ここにはある。いつ来ても新たな出会いがある。

赤木 この会は裸の付き合いができて、本音でズバズバ。それが居心地いい。

藤田 昼間に幹事会をやってもあれだけ集まる。同じ地域でなく大阪じゅうからなのに。それだけ会に魅力があり、得るものがあるから。ありきたりでない学びがある。

二木 座談会のテーマが「活性化の秘密を探る」と聞いたが、それは違うと思う。支部例会が地盤沈下しているので相対的にそう見えるだけ。例会委員長を引き受けたとき、視野を広げる学びをしようと考えた。21世紀の経営者は新しい学びをせなアカン。課題がどこにあるかを探り、発見していく。ウイグルがテーマの例会ではウイグル料理店で歌や踊りに触れ、料理を食べながら考えた。彼らは日本に来ていろいろな目があるから言えないことがある。そんな少数民族の問題とは何か。そういう学びをしていかないと、活性化しない。

野村 活気の一因は共通課題があること。中国に目を向けようとする程度思っている人が集まっている。このままドメスティックだけでいいのかと漠然とでも思っている人が多い。外国に目を向けている人は何か違う。

豊田 日中の幹事会は意見の違う人間がいて、議論の場になっている。いろんな意見を聞けるのが楽しみ。自分を磨く時間になっている。

田中 義務でなくても幹事会に来ようと思わせる求心力がある。いろんな意見があっても聞く耳を持っている。会の名前を変えようという話があるくらい。会自体が発展途上で当事者として作っていきける魅力がある。

■ 研究会の将来は？

合田 最初は中国でモノを「作る」という共通性があった。最近では中国にモノを「売る」ことを望む人が増えてきた。

大塚 深圳への訪中団で財布の製造業が「ミャンマーに行く」と言っていた。東南アジアを見学するのも勉強になるのでは。

二木 「チャイナ・プラスワン」は以前からのテーマだが、そこに惑わされてはダメ。人件費の高騰で引き揚げてきている人たちがおり、訪中団で見た深圳の財布工場など、いわゆる“女工産業”は東南アジアに行く。もう一つのファクターとして「嫌中」「嫌韓」の風潮がある。「中国から学ぶことはない」という人もいるが、それは違う。ASEANのGDPは10カ国合計しても中国の5分の1に過ぎない。中国はまだまだ研究しがいがある。訪中団もまだ全部の省に行っていない。知り尽くしてもいないし、行き尽くしてもいない。

近藤 かつて大阪の中小企業にとっての国際化とは、中国に進出して、安い人件費を利用してモノを作り、それを日本に持ち帰ることだった。1985年のプラザ合意以後、経済のグローバル化が進んだ。安い中国で生産、日本で販売というような、国を単位とした経営や経済は成り立たなくなり、各企業が競争の単位となった。日本・中国・タイ・インドネシアなど、最適の場所で作り、最適の市場で売る時代になってしまった。もちろん中国も含めてだが、自社にとってグローバル化に適した方策を考えることが必要だ。

樋爪 同友会のいいところは生の声で成功も失敗も聞けること。泥臭い、本音の話。一人でも二人でもいいから「勉強になった」という人が入会して、やがて幹事になってほしい。他支部で知らなかったが、訪中団で親しくなって幹事になってもらう。それがいい。

坂元 訪中団では親子ほども歳の違うベテラン経営者と仲良くなり、何でも教えてもらえた。ここで同友会の学びの真髄を得た。

藤田 一番の魅力を作っているのが、毎年そこそこの人数でそこそこの期間海外に行っていること。中国はずっとウォッチしていくが、中国だけにこだわらなくてもいい。中国を外すということはないが。

■ 「軸足」が中国か？

川西 当社は日本人の人材派遣をしていたが、外国人の技能実習生を始めた。最初は中国人ばかりだったが現在はほとんどがベトナム人。会の方向がそちらにシフトするのも面白い。中国に軸足を置きながら、プラスワンも勉強できればいい。

落合 会員歴が古いのは、僕、和気さん、中野さん（カワモト・マニュファクチャリング）。中野さんを最初は理屈っぽいと思ったが、いまは仲がいい。二木さんも小難しい。でも仲良くなれる。それがこの会のいいところ。そして会を育ててまとめ上げた樋爪さんからはリーダーシップを間近で学ばせてもらった。

これから会がどう在るべきか。中国一辺倒なら人が集まらないかも。見飽きたのかも。しかし生産国としての魅力はまだまだある。13億人、ピンもあればキリもある。人件費が高いからもう不要、とはならない。まだまだ中国は奥深い国。中国に「軸足を置いて」というのはいい表現。会の名前を変える意見にはある程度賛成。比較のために中国以外を見るのもいい。仲良しクラブにならず、新しい血をドンドン入れる。訪中団で野村さんと夜遅くまで飲んで、幹事を頼んだ。いかに人を引き込むか、それが樋爪流。

松岡 母親が中国生まれでソ連兵に追われて命からがら日本に帰ってきた。「中国とは仲良くしなさい」とずっと言われた。昔上海で日本語を話す中国人から「東アジア経済圏だよ」と言われた。「軸足は中国」。非常にいい言葉だ。研究会の名前が変わったとしても、軸足は変わってほしくない。



■ まとめ

本誌の連載50回を記念して企画したこの座談会。「希望者はどうぞ」と告知すると、なんと幹事の半数以上が集まりました。まとめは不可能な熱い議論。このカオスに当研究会の魅力があるのかも？

まとめ：坂元正三（坂元鋼材株式会社）